

# 日本美術の美をめぐぐる

## 東京国立博物館

**この秋、縄文土器から若冲、北斎の絵画まで、必見！ 日本美術を代表する名品を一堂に展示！**

東京国立博物館の所蔵品の中より、縄文時代から江戸時代まで、各時代の名品を一堂に紹介します。縄文土器や埴輪から、江戸時代の若冲や北斎まで、日本美術の流れを、国宝や国指定の重要文化財などをまじえた貴重な作品でたどります。日本の芸術、文化に通底する特質や、美意識をふり返るとともに、本展がこれからの文化継承とさらなる発展について考える契機となることを願い、開催いたします。

会 期 2018年11月2日(金)～11月25日(日)

開館時間 10:00～19:00

※金曜日・土曜日は20:00まで(入場は閉館の30分前まで)

会 場 大分県立美術館 3階 コレクション展示室

観 覧 料 一般 800(600)円、大学生・高校生 500(300)円

・( )内は前売および20名以上の団体料金 ・中学生以下は無料 ・障がい者手帳等をご提示の方とその付添者(1名)は無料 ・大分県芸術文化友の会 びびKOTOBUKI無料(同伴者1名半額)、TAKASAGO無料、UME団体料金 ・学生の方は入場の際、学生証をご提示ください

主 催 大分県芸術文化スポーツ振興財団特別企画実行委員会

共 催 大分合同新聞社、TOSテレビ大分

特別協力 東京国立博物館

後 援 大分県、大分県教育委員会、大分県芸術文化振興会議、西日本新聞社、NHK大分放送局、エフエム大分、大分ケーブルテレコム株式会社

### 関連イベント

トークイベント「日本の美 -その歴史をめぐって-」

講師：田沢裕賀氏(東京国立博物館 学芸研究部部長)

日時：11月2日(金) 13:30～15:00

会場：大分県立美術館 2階 研修室

定員：80名

参加費：無料(要事前申込)

[申込方法]

参加ご希望の方は、メールまたはお電話にてお申し込みください。

メールの場合：app@opam.jpへ〔件名〕にイベント名、〔本文〕にお名前とご連絡先のお電話番号をご記入の上、お送りください。

電話の場合：097-533-4500にご連絡の上、イベント名とお名前、ご連絡先のお電話番号をお伝えください。

※定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。

### ギャラリー・トーク

日時：11月3日(土)、11月10日(土)、11月17日(土)、11月23日(金)、11月24日(土)

金曜日は16:00～17:00、土曜日は14:00～15:00

会場：大分県立美術館 3階 コレクション展示室

案内：当館学芸員

参加費：無料

※参加には当日観覧券が必要、申込み不要



伊藤若冲《松梅群鶏図屏風》(部分)  
江戸時代(18世紀)  
東京国立博物館所蔵  
Image:TNM Image Archives



葛飾北斎《諸國瀧廻り 美濃ノ国養老の滝》天保4(1833)年  
東京国立博物館所蔵  
Image:TNM Image Archives



第33回 国民文化祭・おいた2018  
第18回 全国障害者芸術・文化祭 おいた大会



**東洲斎写楽《市川鯉蔵の竹村定之進》江戸時代 寛政6(1794)年 重要文化財**

写楽の役者大首絵の最高傑作として名高い逸品。優れた肖像芸術として世界的に評価されています。寛政6年(1794)の5月に河原崎座で上演された「恋女房染分手綱」の中で、市川鯉蔵が演じた能役者役の竹村定之進を取り上げています。竹村定之進は、娘である重の井と伊達の与作の不義密通が明るみに出たことから、その謝罪のため能の秘曲「道成寺」を主君に伝授し、娘の身代わりとなって、道成寺の鐘の中で切腹する役です。竹村を演ずる市川鯉蔵こと五世市川団十郎の堂々たる姿は、当代随一といわれた名優の威風を余すことなく伝えていきます。江戸後期の浮世絵界に彗星のごとくあらわれ、僅か10か月の制作活動の末、忽然と姿を消した写楽は、謎の浮世絵師ともいわれます。そんな写楽の傑作をお見逃しなく。



1

**《地獄草紙》平安時代(12世紀) 国宝**

平安時代の末期、釈迦の教えが衰え乱世がおとずれるという“末法思想”が流行しました。社会不安が増大する中で、極楽浄土への往生を希求する“浄土思想”そして“六道思想”が生まれました。六道とは、生前の業(善悪の行為の結果)によっておもむく六つの世界のこと。地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天道の六種があり、これらの世界を輪廻転生するという思想です。《地獄草紙》は、地獄道に墮ち、苦しむ罪人のありさまを描いています。この場面は、殺生や盗みなどを犯した罪人が墮ちる雲火霧(うんかむ)地獄。獄卒(悪鬼)に追われる裸の男女が、燃えさかる大火炎の中で苦しんでおり、人びとに地獄の恐ろしさを示し、極楽への往生を願う心を抱かせました。「悪いことをしたら地獄に落ちる」という古くからある教えの由来といえるでしょう。平安時代の希少な国宝絵巻に示された、人間の根源的な精神文化を振り返ってみるまたとない機会となるでしょう。



2

**伊藤若冲《松梅群鶏図屏風》江戸時代(18世紀)**

超絶した技巧、奇抜な構成が注目を集める江戸時代の奇想の絵師・伊藤若冲。若冲は、京都の錦小路にあった裕福な青物問屋「枳屋」の長男として生まれています。40歳で隠居して以後、本格的に絵画制作に取り組みました。“鶏の画家”としても知られるほど、若冲は鶏を描いています。この《松梅群鶏図屏風》には、歌舞伎役者のように見得をきる鶏が、躍動的な筆さばきで描かれています。また細かい点描で描かれた石燈籠や、気持ちいいほど豪快な墨線で松と梅が描かれており、若冲の筆と墨の自在な表現が堪能できる屏風といえるでしょう。江戸時代にこんな個性的な表現を生み出した画家がいたことに驚きます。華麗な色彩の画家としても知られる若冲ですが、本展では水墨の見ごたえある大作屏風をとおして、若冲の奇想・幻想の世界を楽しんでいただきます。



3

(写真1~4) 東京国立博物館所蔵  
Image:TNM Image Archives

**《深鉢形土器》縄文時代(中期) BC3000~BC2000年 長野県伊那市宮ノ前出土**

岡本太郎が美術雑誌『みづゑ』誌上に「四次元との対話—縄文土器論」と題したエッセイを発表したのは1952年のことでした。その文章の冒頭には「縄文土器の荒々しい、不協和な形態、紋様に心構えなしにふれると、誰でもがドギツとする。なかんずく爛熟した中期の土器の凄まじさは言語を絶するのである。」とあります。岡本太郎は、東京国立博物館の展示室で実見した縄文土器の造形について紹介し、それまで美術史で語られることのなかった縄文の逞しい美感を初めて取り上げたのです。この《深鉢形土器》も「思わず叫びたくなる凄みである」と岡本によって紹介された縄文時代中期の土器の一つ。激しく、鋭く、縦横に躍動する隆線紋の奔放さに、原始の逞しさ、豊かさを感じることができます。



4

[お問い合わせ] 大分県立美術館 美術館管理課 広報担当 宇都宮・木藤・後藤・植木